～常識を超えた思いやり～

松岡靖さん
大学 教員

10年ほど前の初夏、大学での出来事です。たまたま私はある2年生とすれ違いました。その学生に感じていた不思議について、私はふとした思い付きで尋ねました。というのも、入学から一年以上の間、私がみる限りその人は誰にも優しく接していたからです。その思いやりのレベルは不思議なほど高かったからです。

「あなたはいつも周りの皆にすごく配慮できてますね。そうしてると疲れることはないですか？」。すぐさまその人は笑顔とともにこう答えました。「先生は心配してくださってたんですね。ありがとうございます。」

この答えは今も忘れられません。私の常識では思い付かない答えなので、返す言葉がありませんでした。ごく普通に質問を受け取れば、こんな答えが返って来そうです。「はい、疲れることもあります」とか、「いいえ、そんなに疲れないです」とか。ところがどちらでもなかったのです。この場面でもその人は相手に思いやりと感謝を示したわけです。

ここから先は私の想像です。その人が生きてきたスタイルが、常識を超えた答えにも現れたのでしょう。その時その場のために準備した答えとは思えません。普段からこんな質問をされるとは考えにくいからです。また私が教員だからといって気を遣ったとも思えません。誰に対してもこう答えるのだろうと私は納得しました。

19歳にしてこの思いやりを示せるのは素晴らしいです。その人が生きてきた環境がこの資質を育てたのでしょう。この長所は周りの大人からのギフトかもしれません。ただ一人の先輩として私は一抹の心配も感じます。世の中には悪意のある人もいますし、思いやりを裏切られたりもします。この人にはそんな苦労に負けてほしくない。そんな心配をしつつも、本学学生の長所、その白眉がこの答えにありそうです。